

○JA高知県コスモスニラ部会 は、冬場の出荷量が少なく、秀品率が低く、「そぐりセンター」への出荷量は目標に届いていない。また、新規就農者や若手生産者の経営が安定していない。

○そこで、普及所は作型にあった栽培管理や病虫害対策の指導、新規就農者や若手生産者を対象とした栽培管理・経営管理指導に取り組んだ。

○その結果、秀品率と高単価期の出荷量が向上し、「そぐりセンター」への出荷量も前年より増加した。また、若手生産者に部会トップレベルの技術を習得させることができた。

具体的な成果

1. 周年安定生産と品質向上への支援

■品質向上への意識が高まり、

4～2月秀品率が向上(35%→43%)

■適正な温湿度管理の実施により

12～2月出荷量増加

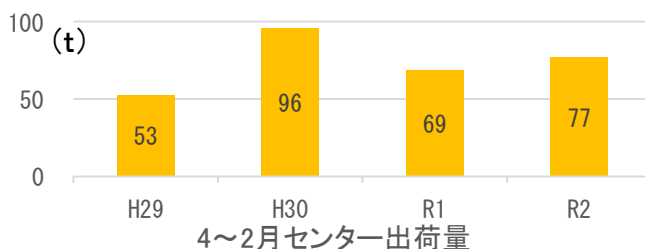
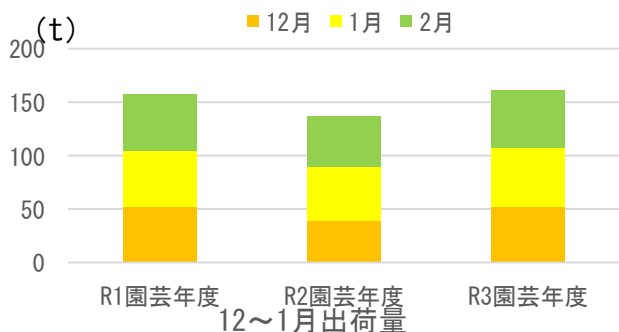
(137t→161t)

■環境制御技術導入率

63%

■市場事故1件(黄化)

■そぐりセンター出荷量77t(4～2月)



2. 担い手対策

■経営目標達成農家 4戸/6戸

■3年目の新規就農者が、部会トップの秀品率を達成できるレベルに成長

■女性生産者の組織活動が定着

普及指導員の活動

■月例会や栽培講習会などの勉強会

(栽培講習会: 17回、参加者178戸)

(現地検討会: 4回、参加者54戸)

■個別巡回指導(146回のべ604戸)

■定点生育調査(49回)

■技術資料の掲示・送付(16回)

■環境測定データの分析(5戸)

■GAP支援(出荷場: 6回)

■そぐりセンターでの作業効率調査(3回)

■生産者がそぐりセンターでの作業状況を確認するセンター反省会の実施(1回)

■重点指導対象の栽培・経営状況を確認する、個別ミーティングの実施(7回)

■研修の進捗状況を確認する研修状況確認面談(6回)

普及指導員だからできたこと

1. 頻繁な個別巡回と定期的な生育調査によって、現場の状況を把握しているから、病虫害発生情報とその対策をタイムリーに情報提供、指導できた。

2. 落等要因や環境測定データを分析することによって、その生産者、その圃場にあった助言指導ができた。

3. 日頃から密接なコミュニケーションをとっているから、重点指導対象者への支援方法など困ったときに相談すると、部会役員や指導農業士がフォローしてくれる。

高知県

強いニラ産地づくりと次世代ニラ農家の経営安定

活動期間：令和2年度～（継続中）

1. 取組の背景

JA高知県コスモスニラ部会（佐川町、越知町、仁淀川町）は、生産者44戸、栽培面積12ha、販売金額が管内第3位であり、地域の基幹品目である。しかし、高単価期である冬場の出荷量が少なく、秀品率が38%と低い。平成29年度に地域全体の労力確保のしくみとして、そぐり・計量結束センター（以下そぐりセンター）が設立されたが、作業効率の低さから目標出荷量に届いていない。また、部会の担い手である新規就農者や若手生産者は、栽培技術と経営管理能力の習得が十分でないことから、経営が安定していない。

そこで、周年安定生産と品質向上を目指して作型にあった栽培管理や病害虫対策の指導、担い手支援対策として新規就農者や若手生産者を対象に栽培管理・経営管理の両面からの重点指導に取り組んだ。

2. 活動内容

- （1）周年安定生産と品質向上への支援
- ・作型にあった栽培管理指導

全戸全ほ場への土壌分析と、品種比較試験、炭酸ガス施用試験結果をもとに作型にあった栽培管理や、環境測定データ結果をもとにした厳寒期の適正な温湿度管理を指導した。

また、週1回の定点生育調査により生育状況の傾向を把握し、肥培管理を指導した。

栽培技術の高位平準化を目的とした現地検討会を、栽培管理のポイントとなる時期に4回開催した（写真1）。

- ・病害虫防除の徹底

時期毎の品質低下の原因に合わせて、合計17回の栽培講習会や146回のべ604戸への個別巡回で指導し、病害虫の定期防除や予防対策を周知した。



写真1 現地検討会

新型コロナウイルス感染症対策のために栽培講習会を開催できなかった時期は、技術資料の出荷場掲示や郵送により、合わせて16回病害虫の発生情報とその対策を周知した。また、温湿度データの分析により白斑葉枯病が発生しにくい環境づくりや葉先枯れ対策を指導した。さらに、品質向上や異物混入の防止を徹底するため、生産者と出荷場を対象にガイドライン準拠GAPも実施した。

・そぐりセンターの作業効率の改善

そぐりセンター出荷者を対象としたそぐりセンター反省会を行い、ニラの品質が歩留まりに与える影響や、そぐりセンターが求めるニラの品質について、実演しながら説明した。

(2) 担い手支援対策

45歳以下で栽培経験年数が10年未満の次世代ニラ農家を重点指導対象と設定し、113回のべ270戸の個別巡回指導を行った。特に重点的な進捗管理が必要な生産者1戸を対象に、指導農業士の協力を得て個別のミーティングを月に1回実施した(写真2)。



写真2 重点指導対象者とのミーティング

次年度就農予定の研修生を対象に、作業毎の研修状況確認チェックリストを用いた、研修内容の理解度を確認する面談を6回行った。

簿記講座・研修会は9回開催し、記帳内容の確認や修正、経営管理状況の確認を行った。経営を主に担う女性生産者の活動支援として、他産地視察や目慣らし会を実施した。

3. 具体的な成果

(1) 周年安定生産と品質向上への支援

出荷量 161t (12~2月)、秀品率 43% (4~2月)

環境制御技術導入率 63%

そぐりセンター出荷量 77t (4~2月)

(2) 担い手対策支援

経営目標達成農家 6戸中 4戸

3年目の新規就農者が、部会トップレベルの秀品率を達成。

女性生産者の組織活動が定着。

4. 農家等からの評価・コメント

- ・現地検討会へ参加すると、他の生産者の上手な栽培管理を目の当たりにしてショックを受ける。毎回、新たに学ぶことがある（部会役員）。
- ・新規就農者へ行った個別ミーティングは成果が出ている。今年新たに就農した者に対しても、大きな失敗をさせないように重点的な指導が必要なので、引き続き支援をしてほしい（部会長）。
- ・1年間ミーティングなどを受け、自分の課題が分かったし、自信がついた部分もある。数年後には自分が指導する側に回れるように、今後も栽培管理に取り組む（重点指導対象の新規就農者A氏）。

5. 普及指導員のコメント

頻繁な個別巡回と定期的な生育調査によって、現場の状況を的確に把握していたため、タイムリーな情報周知ができた。また、生産者毎の落等要因や環境測定データの分析による、その生産者、そのほ場にあった助言指導が、出荷量と秀品率向上につながったと感じる（高吾農業改良普及所 主幹 福本諭子）。

指導農業士の協力を得ることで、重点指導対象者に対して細やかな指導ができ、栽培管理技術の向上を図ることができた。また、地域で新規就農者や担い手を育成していく体制づくりにつながったと感じる（高吾農業改良普及所 主査 中平龍介）。

6 今後の展開等

反収、秀品率ともに県内平均と比べて低く、また部会の目標にも達成していないため、改めて基本栽培技術の徹底を図る。品質や収量の低下要因となる病害虫の防除対策の周知につとめ、早期防除を徹底する。また、所得向上のためには厳寒期の増収が不可欠なので、環境制御技術を活用したデータ駆動型農業を支援する。

令和3年に新規就農する生産者を含む6戸を次年度の重点指導対象者として新たに設定し、作業の進捗管理、栽培と経営の課題の把握や改善策の検討を支援する。また、女性生産者の活動も継続して支援し、女性が共同経営者として認められ、また女性生産者自身も成長できることを目指す。

そして、圃場での機械調製にあった品質の良いニラづくりから、そぐりセンターの作業効率改善まで連続した支援を行うことによって、そぐりセンターの安定した運営を支援する。